

飯守泰次郎 &  
東京シティ・フィル

## マルケヴィチ版の魅力全開



集中力に満ちた熱演を導いた飯守泰次郎  
—池上直哉氏撮影

1983年1月。大指揮者マルケヴィチが東京都交響楽団に客演した。ベートーベンの九つの交響曲の楽譜校訂を終えたばかり。都響とは第3番を披露。素晴らしかった。が、彼は3月急逝。校訂の偉業も忘れられた。そのマルケヴィチ版に徐々に日が当たった。しかも日本で。飯守泰次郎と東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団が全5回で9曲に取り組んだ。最終回は第2番と第5番（13日、東京・初台の東京オペラシティ）。もうびっくりした。素晴らしすぎた。マルケヴィチ版と言っても別に楽器を変えたり音を足し引きしたりしているわけではない。発見と創意は別にある。たとえばベートーベンが音符に付したスタックカート記号。全部同じに見えるそれを、古い演奏習慣を掘り起こし4通りに分類し直す。1通りと思えたスタックカートの音符の長さが多様になる。フレーズの作り方も連動し

て変わる。歌が濃やかになる。また弦楽器の弓づかいもなるべく昔の習慣に戻される。現代一般のやり方より弓の上げ下げがずつと多い。弓を動かす距離も速度も何倍か。演奏者に高負担。だがその分、勢いも音量も出る。目にも楽しい。そんなマルケヴィチ版の工夫を飯守とシティ・フィルが全開にする。濃い。熱い。特に第5番。弓の運動量に目を奪われる。演奏会が大運動会になる。フレーズのどんな隅っこも、名人の書の墨汁の細かな飛沫のように生動した。

実は、30年近く前の校訂者本人による第3番の演奏はずいぶん違った。仕掛けは決してこれみよがしにはされていないかった。表向きは淡泊に聴こえた。飯守とシティ・フィルはマルケヴィチ版のポテンシャルを初めて赤裸々にしたのかもしれない。興奮に満ちた歴史的一夜。

（片山杜秀・音楽評論家）

月曜＝音楽 火曜＝文芸／批評 水曜＝美術 木曜＝舞台 金曜＝映画 土曜＝ポップ